

2012年
11月15日
木曜日

田 禾 准教授（人文科学、中国語学） 現代の外郎と西施

この間友人から名古屋の名物「ういろう」を頂きました。蒸したもち米で、絶妙な甘さを加えた美味しいお菓子です。食べながら、その名前の意味を尋ねました。解釈は、元の時代に当時の中国から日本に来た陳宗敬が漢方薬を日本人に紹介しました。陳さんの身分は「礼部員外郎」であるので、その薬を唐音のまま「ういろう」と命名しました。お菓子の名前になるのは、外郎菓を飲むときに、口直しに添えたお菓子に由来するということを教えて頂きました。このような歴史の人物に由来するのは中国にもあります。中華料理の「マーボ豆腐」の「マーボ」はその料理を作ったおばさんの名前という伝説があります。「マ」は「あばた」のことで、「ボ」はおばさんと言う意味です。「豆腐」とゆかりがある女性がもうひとりいます。「西施」

という美人です。豆腐屋さんの看板娘のことは「豆腐西施」と言います。西施は中国古代四大美人「春秋時代の西施、漢代の王昭君、三国演義にも登場した貂蟬（後漢）、と唐代の楊貴妃」の中の一人です。西施の名は美女の代名詞としてその後も広く人々に語り継がれ、今でもよく使われています。中国では「情人眼里出西施」という諺があり、恋する男の目にはだれもが西施のような美人に映るという意味です。西施の美貌は日本にも伝わっています。松尾芭蕉は「奥の細道」の中でこんな俳句を残しました。「象潟や 雨に西施 ねぶの花」。西施は美人の代名詞として中国現代文学にも登場しました。中国現代文学史でもとても高い位置を占める有名な作家魯迅の小説『故郷』の中に現れています。豆腐屋さんの看板娘楊さんのことを「豆

腐西施」と言いました。この作品の影響で、店に客を引き付ける魅力な娘のことは「〰〰西施」というようになりました。食べ物以外に、現在日常生活の中には歴史人物の名前をつけるものもあります。例えば「中山服」と言う服装は孫文の名前を使っています。「中山服」は日本語で「人民服」と呼ばれるもので、孫中山先生が日本留学中に日本の学生服をモデルにデザインして、封建社会の清王朝と決別する新しい中国の象徴となりました。その服装の腕に3つボタンがありまして、それぞれ三民主義の「民族、民権、民生」を象徴しているそうです。毛沢東はこの服を愛着して、外国要人と会う際に必ず「中山服」の姿で現れたため、英語で「Mao suit」とも訳されています。ある人物の名前を付けて、中国で一時的に

流行した服装がもうひとつあります。70年代山口百恵が出演したテレビドラマの主人公幸子が着たワンピースを「幸子スカート」と命名され、結構人気がありました。以上の例は言語コミュニケーションの語用論でいうと、語彙活用の「範疇延伸(category extension)」や「換喩(anetonymy)」などの現象です。言葉が実際に使用される時、本来の意味から離れて、活用される現象です。西施は春秋時代の人物から「美しい女性、風景」まで拡大され、美しい女性、風景がその関わる人物の名前で入れ替えて呼ばれるようになってなのです。そして、どの言語も同じ現象が存在し、人間はコミュニケーションする際に自動的にその語彙の変化を把握できる。これは実にすばらしい人間の能力であるといつも感じています。■